

内科医 つれづれ草

高山浩一

最近、がんの治療において「チーム医療」という言葉を学会や研究会でよく聞くようになりました。さまざまな臨床科の医師やさまざまな職種の方々が連携して医療を行うということですが、これは今に始まったことではありません。

私が病棟で働いていた頃も、いろいろな職種の方と協力して診療していました。ただ、今から振り返ると、その連携の範囲は狭かった気がします。

総力戦のがん治療

患者さんは闘う一員

抗がん剤の種類が少なかった頃は、注意すべき副作用も限られていました。現在はさまざまな抗がん剤が登場し、副作用も多様ですから、チェックしないといけないことが随分と増えました。もはや医師が一人でカバーできる範囲を大きく超えており、必然的にチーム医療の重要性が叫ばれているものと思います。



イラスト・山本重也

抗がん剤の種類が少なかった頃は、注意すべき副作用も限られていました。現在はさまざまな抗がん剤が登場し、副作用も多様ですから、チェックしないといけないことが随分と増えました。もはや医師が一人でカバーできる範囲を大きく超えており、必然的にチーム医療の重要性が叫ばれているものと思います。

チーム医療を必要とする抗がん剤の代表格は、「オプジーボ」をはじめとする免疫チェックポイント阻害剤と呼ばれる薬でしょう。肺がんを対象とした免疫治療の薬が次々と発売され、今

とが知られています。まさに、良薬は口に苦しです。しかも、やっかいなことに副作用がいつ、どの臓器に起こるか予測がつかないのです。この薬を使つてうまく治療していくには、医師と医師の連携がとても大事です。多くの病院では甲状腺の問題が起きたら内分泌内科のこの先生、肺炎が疑われたら呼吸器内科のこの先生というようにそれぞれ担当を決めておき、連携して副作用に対応するチームをつくっています。さらに、がん治療に詳しい、看護師さんや薬剤師さんが加わって、副作用を見逃さないように注意を払っています。

患者さんはこの副作用対策チームによって守られるわけですが、同時に患者さん自身がチームにおいて最も重要なメンバーでもあるのです。

治療を開始する際にはまず、起こる可能性のある副作用についてしっかり理解していただきます。病院によっては退院する際にちゃんと理解できているか、簡単なテストをするところもあるくらいです。患者さんも病院で試験を受けさせられてびっくりされることでしょう。

退院後は副作用の兆候が表れていないか、患者さんには毎日自分の体調に注意していただきます。患者さんはわれわれ医療者とともにがんを闘う一員でもあるのです。がん治療はいまや総力戦の時代です。

(京都府立医科大教授)